

太宰治著述一覽稿(Ⅶ)

——自昭和十七年 至昭和十九年——

山内 祥史

恥・婦人面報・新年号、第四百五十五号・昭和十七年一月一日発行・152
頁・「創作」欄

『女性』(博文館、昭和十七年六月三十日)に、全文収載された。

『太宰治全集第七巻 ハムレット』(八雲書店、昭和二十四年二月二十八日)に、全文収載された。

〔付記〕「絵・三岸節子」

或る忠告・新潮・新年号、第三十九年第一号、通巻四百四十八号・昭和十七年一月一日発行・28頁・「新しき文学の道」欄

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十一月二十日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕初出誌奥付には「四百四十四号」とある。

新郎・新潮・新年号、第三十九年第一号、通巻四百四十八号・昭和十七年一月一日発行・65頁・「創作特輯十篇」欄

『風の便り』(利根書房、昭和十七年四月十六日)に、全文収載された。

『太宰治全集第七巻新ハムレット』(八雲書店、昭和二十四年二月二十八日)に、全文収載された。

〔同時代評〕岩上順一「文芸時評―内面の戦ひ―」(『日本評論』第十七巻第二号、昭和十七年二月一日)には、つぎのように記されている。

殊に最近の私小説に対しては、その安易な作家精神のあり方に対して否定を感じずにはゐられない。なるほど、私小説の発生には、追いつめられた知識人の自己認識が、その根底にあることを忘れてはならないであらう。その根本的な事情が失せない限り、私小説も、亦存在する権利をもつてゐるであらう。しかし、絶対の場に立つ知識人の自己認識が私小説によつてしかなしとげられないなどといふのは詭弁であらう。知識人の自己認識の道は、私小説による以外に多々ある。しかも、より本質的な道が存するのだ。それを仮りに客観小説の道であると言つて置かう。だが、今、私は小説形式について云々してゐるのではない。要するに、作家が自己を凝視し、自己を支配する普遍的歴史規定を自覚し、その自覚に立つて、今日の歴史的現実にたいする行為的創造的主体とならんがためには、私小説であらうと客観小説であらうと、その形式のいかんにかかはらず、根柢に於てあくまできびしい作家精神の存在が前提されねばならないと考へる。

その点について強く抗議したい作品は沢山ある。自己陶醉に安んじてゐるその精神に憤りをおぼえないではゐられぬものもすくなく

い。それを全部あげるのは無益であらう。またさうしたいとも思はない。しかし、今月の作品の中からは、特に火野葦平の「朝」と広津和郎の「号外」と太宰治の「新郎」と芹沢光治良の「冬のはじめ」と真杉静枝の「眼鏡の小母さん」とは、指摘しないではゐられない。私がこれだけをとくべつにとりだしたのは理由がある。それは、これらの作品が、符合したやうに、あの十二月八日の国民的感動と結びついた作品であるからである。これらの作品は、直接にか、または間接にかすべて、あの日の感動を表現しようと試みたものだからである。あのやうな歴史的な、また全国民的な感動の瞬間を、これらの諸作家が語らないでゐられなかつたことは理解できる。これを語ることは文学のすばらしい仕事である。それを語つたからと言つてそれを非難することはまちがひである。私もまた、彼等が、あのやうな国民的歴史的な絶対の瞬間を書きとめてゐることに強い支持をおくるものである。／＼しかし同時に、そこに問題がある。彼等はあの瞬間をかきしめた。だが、そのかき方はあのままではよかつたか。彼等の物語りの仕方。小説の形成の方法。それはあれでいいのであらうか。――否だ。そこには単に書き方や方法の安易さがあるばかりでなく、また作家としての精進の不足があり、文学を軽く見てゐる安易な精神が存在する。この安易な作家精神の弛緩が、その私小説的方法の否定的な側面と結びついてゐるところに問題があるのだ。(中略)／＼自己を社会的歴史的限定より切離し、国民生活の普遍法則より切り離し、ひたすら自己を、自己又は個人の心理の動きに即してのみ追求しようとするところに、私小説の芸術的不具性がつとも明白にあらはれてゐる。そ

れは、さきにあげた一聯の作品の悉くを支配していると言つていい。殊に、太宰治の「新郎」のごときはその甚しいものであらう。彼は、自分の家の食卓に何も無いことを、悲しむまいと思つてゐる。「食卓の上には何も無い。私には、それが楽しみだ。何も無いのが楽しみなのだ」と言つてゐる。そのやうに個人の家には何も無い。にもかかはらずある夜「よそで晩ごはんを食べて、山海の珍味がたくさんあつたので驚いた」と言つてゐる。彼は、そこに何の矛盾も感じてはゐない。これは全く不思議ではないだらうか。それは全く不思議である。しかも実は不思議ではない。それは彼が、自己を全く個人的に考へ、その個人的自己のなかに閉ぢこもつてゐる証拠であるからである。個人的に考へれば、一個の食卓に何も無いのは全く自己一個の心で我慢ができるであらう。しかし、一個人としてではなく、一市民として、そのやうな不合理を憂へ、それに対する方法を考へないでゐられるであらうか。なぜにそのやうな欠乏が来たのか。その欠乏はどのやうにすれば合理的に克服できるか。どのやうに生活を再編成しなければならぬか。個人個人としてではなく、全市民、全国民としての生産力の発展のためにどうすればこれに対処できるか。／＼このやうに、太宰治は、この私小説に於て、自己を偽つてゐるばかりではないのだ。彼は、全く狭い自己の圏内にとぢこもつて、その内で、自己の心理を偽ることによつて、現実の重要事を見ずに過さうとしてゐるのだ。これが作家であらうか。作家とは、このやうに、すべての現実を目をつぶり、白を黒だと言つて自己を瞞着すると同時に、読者を偽るものなのであらうか。また作家とは、そのやうな自己の心理の圏環

の内部で、満足したり諦念したり、楽しんだりしてすまずものであらうか。そのような自己偽瞞のなかにモラルを追及し得ると考へてゐていいのであらうか。——私にはさうは思へない。思へないどころか、そんなのは作家ではないと考へる。何故なら、作家は、自己をもつとも真に露出し自己を否定し超克することによつて、自己の中に含まれてゐる世界史的現実の一端に参ずるものだからである。作家は、狭い自己的個人の見解や気分や心情を超えて、自己の内部にある普遍的世界の一市民たることの自覚に立たねばならぬ。どこまでも真理と道徳を求めて戦はねばならないのである。それは哲学者の言ふ、歴史的社会的限定への参向とも言へるであらう。歴史的社会的限定の自覚者として、即ち真の道徳と良心の使徒として、作家は、最初より最後まで自己の個人的存在を離れなければならぬ。それは作家的私生活の否定であらう。

(A)「文芸・新潮」(「三田文学」第十七卷第二号、昭和十七年二月一日)には、つぎのように記されている。

さて両雑誌通計十七篇を通読するに、これと言つて取上げる程のことながらも無いが強いて言ふならば、日本の小説に二つの風潮が感じられるやうである。「琴」室生犀星(新潮)「新郎」太宰治(新潮)「安宅」伊藤整(新潮)「読者より」宮内寒弥(新潮)「父の記憶」伊藤整(文芸)「その前夜」寺崎浩(文芸)などは勿論一列には扱ひ兼ねるが、その底に流れる一沫の苛立ちは一つの風潮と言ふことが出来るであらう。此の苛立ちを包みかくさず端的に表現してゐる処に太宰の流行作家的要素が多分に含まれてゐることは甚だ当代的なことである

が、これらに伴ふ一種の鼻持ちならない不潔感はこれを以て文学的主流とはなし得ない大きな理由であらう。

伊藤整「自己を語る作家——文芸時評——」(「知性」第五卷第二号、昭和十七年二月一日)には、つぎのように記されている。

私はこの月、所謂私小説と呼ばれる形の多くの作品を読んだ。そして私は室生犀星氏の「琴」、太宰治氏の「新郎」、上林曉氏の「流寓記」、金史良氏の「親方コブセ」、里見弴氏の「八畳記」、田畑修一郎氏の「海浜記」、福田清人氏の「北海」、坂口安吾氏の「古都」等に、各々すぐれた達成のあとを見出したのであるが、これ等の作品に現はれる「私」(または「私」に代置された人物)は、その生活や立場や年齢などを、読者に周知のこととして、前置きの説明ぬきに描かれてゐる。その点においては、これ等の作家たちは、自ら作家であると共に作中の主役であり、時としては、思想や倫理や美意識についての主張者ですらある。そのことを私は構はない。むしろ当然のことだとすら思つてゐる。小説とは空に作為された構作物ではない。それどころか現在小説といふものは、私はある意味では作者の主張を含んでゐる論述的なものであるべきだと思つてゐる。(この点については、私は従来の自分の考へかたを訂正したい。そしてなほこの点についてはもつと詳しく考へ、そのことにふれて書きたいのであるが、いまはそこへ入つて行く余裕を持つてゐない。)さう思ふと、私は、作品の主人公が公然と作者その人であることは何等奇異とはしない。またその主人公のまはりに置かれる人物が、いかに文壇の皆がよく知つてゐる某々氏であることが一見して明かであるか、といふこともさして問題

でない。だがそれ等の人物は、その在り方が一応妥当性をもつて読者に紹介されることはどこまでも描出の第一の条件だと考へられる。そしてそのことは、事実接近して描かれるよりも、人物が文字によつて描かれたものとして完了されてゐることが必要だと思はれる。(中略)／太宰治氏の「新郎」と中山義秀氏の「破れ傘」とを興味を持つて私は読んだ。外に今月から書き初めた島木健作氏の「北方の魂」や井上友一郎氏の「時の人」や中谷孝雄氏の「梁川星巖」等の歴史小説についても二三触れたい問題があるが、それはまた別な機会に譲らうと思ふ。太宰氏の作品と中山氏の作品とは、ともに一種の傲りをもつて自己を語らずにゐられぬ性癖ある作家たちの私小説として、痛々しい、苛立たしい印象を読むものに与へる。しかし「新郎」にある生活の反省は、気取りのやうなものの中から自ら現はれた素朴さがあつて羨しい。その反対のものを多く私たちは見すぎてゐるのである。「明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日みづから思ひ煩はん。けふ一日を、よろこび、努め、人には優しく暮したい」と書いてゐる作者の独白は、ある激しい痛切さをもつて今日の生活者に同感を与へる。

矢崎弾「幸福の探究と自我愛―文芸時評―」(「三田文学」第十七巻第三号、昭和十七年三月一日)には、つぎのように記されている。

しかし、事変後を一転期とする、昭和時代に生れた「私小説」の自我は、(たとへば、高見順、太宰治などにおいて)認識の不安におびやかされ、より多く自我の内面葛藤の心理的告白となつた。その不安は人間への、人間関係への、思想への、その他あらゆる既存の秩序への不安定に対して劃期的な苦悩を表白した。(中略)／自我の分析と

批判、心理と肉体の分離に悩んだ近代自我の表現は、横光利一氏の「機械」以後の諸氏に図式化された。そして、そのよりヴィヴィッドな現実性を波うたせたものは、高見、太宰両氏の初期における私小説であらう。(中略)／最近の小説の多くは、そのテーマを二種のストイシズムへの姑息なあこがれに託してゐる。「新郎」(太宰治)、「四月か五月」(半田義之)、「八畳」(里見淳)、「流寓記」(上林曉)(以上一月号)

(K)「知性・公論」(「三田文学」第十七巻第三号、昭和十七年三月一日)には、つぎのように記されている。

伊藤整は文芸時評「自己を語る作家」でなかなか楽しませて呉れた。その文中で氏は言つてゐる「私は一日本人としての自己の意識をとほすことによつて自分の思考の全体を生かさうと心を定め、またそれに従つて他人の作品についても意見を述べようと思ふ。」と。この見識あつてこそ今月の優れた時評となつたのである。取上げられた作家と作品は宮内寒弥「読者より」室生犀星「琴」太宰治「新郎」中山義秀「破れ傘」である。宮内、室生の二作家の作品に親切極まる筆で殊に室生についての部分は多くの人の同感を呼ぶだらう。筆者はこの四つの作品に出て来る「私」を取上げてその論を統一してゐる。近頃稀しく優れた文芸時評であつた。

岩上順一「文芸時評―芸術の論理―」(「日本評論」第十七巻第六号、昭和十七年六月一日)には、つぎのように記されている。

上林曉の私小説に於て、我々の胸をうつのは、恒にそこに描かれてゐる自己が、社会の具体的な力と葛藤している場面の自己である。

「筐底原稿」や「悲歌」に於て、作家の自己はきびしい社会の掟や人間の本来的な桎梏に衝突してゐる。そこが我々の心を痛ましめるのである。しかし近作「冬の栖」に於ける自己は、何一つそのやうな環境的な力に矛盾し葛藤してゐない。したがつて、自己は自己の内部的感情や心理に閉鎖し、自己自身に没頭してゐるばかりである。太宰治の「新郎」が仙台平の袴に白木綿の腹巻きをして銀座を歩きがたつてゐるやうに、「冬の栖」の上林 暁も、来客の度に足袋を穿きかへようと苦心する。かういふ心理や心情をどれほど吐露したところで、読者はなにもものも得られはしない。私小説が真に人間を把へるのは、(したがつてそこに倫理が探求されるのは)そこに描かれた自己が根柢から国家社会の諸組織の生きた部分としてあるときに限られる。

岩上順一「文芸時評―進路への展望―」(『日本評論』第十七卷第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

今日の私小説が、激流にさらされた知識人の自己確認のねがひから生れたものであることは、私小説にとつては一つの再生であつたかもしれぬ。日常生活の継続性のなかから、歴史的事件の飛躍性を描き出すことは、もとより、それによつても可能であらう。しかし今日の私小説のなしたげた実体は、はたしていかなるものであらう。私は、私小説が単一な線をたどつてゐるとはおもはない。上林 暁の「冬の栖」や、太宰治の「新郎」「小さいアルバム」や、坂口安吾の「真珠」や、伊藤整の得能物のつづきは、それぞれ相異つてゐる。しかし彼等にとつて特徴をなしてゐるのは、彼等がひとしく、自己の生活をできるだけ外界の激動にむすびつけようとしてゐることだ。十二月八日は

彼等にとつてもつともはげしい感動をあたへた。あまりにはげしいために、彼等の足を大地からうきあがらせた。これらの私小説が、自己を語るがごとくみえながら、決して真実の自己を批判し解剖するものでないことはすでにしばしば語られた。自己確認への意欲は、しばしば安易な自己の小主観への陶醉におちいる。私小説の一つのコースがここにある。

内海伸平「太宰治論」(『赤門文学』第二卷第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

人の噂も七十五日。デカダンの定評は消えて行つたが此の日蔭の花は、今尚美しく咲いてゐる。「その日」が晩年であつた」彼の近況は、「一日一日をたつぷりと生きてゐる」文学の「新郎」である。それ故に、太宰の文学を簡単に「混乱時代」の産物であるとは云ひ切れない。(若し単に混乱の産物なら、今頃は時代の泡沫の中に消へて行つたらう。)勿論彼の固有な性格は「混乱時代」のあれやこれやの要素に色付けされてはゐやうが、大切なことは、それに支配されてはゐなかつた。だから彼は歴史なしには理解されないが、他のどんぐり作家に比べて、より、歴史的には理解されない。簡単に申すと太宰文学の特徴は、時代や環境の裡に存するのではなく、彼の本質と運命そのものとなつてゐた。つまり彼は時代の子であると共に、時代を越へた「驕慢の徒」である。「二十世紀の旗手」と自称する所以でもあらう。

決して野郎事大の思ひ上りではない。／(略)／太宰がよく聖書を読んで、その中から引用したり、してゐるのは周知の事実だ。「なんだい、あれは。趣味でキリストごっこなんかにつけてゐるやがつて、鼻

持ちならぬ深刻ぶつた臭い言葉ばかり並べて……」(新郎) 或は「誰」と云ふ小説では、キリストは神の子、自分はサタン、悪の子なりと云ふ問ひから、果して自分は誰かと云ふ、神に対する人間の問題を考へてゐる。だから、そこには生きた人間がリアルに描かれてはゐない。彼の描きたいのは「人間の問題」なのだ。新しい観念小説とも云へるだらう。

〔付記〕末尾に「昭和十六年十二月八日之を記せり。／この朝、英米と戦端ひらくの報を聞けり。」とある。

食通・博浪沙・第七卷第一号・昭和十七年一月五日発行・12頁

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十一月二十日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

十二月八日・婦人公論・二月号、第二十七年第二号・昭和十七年二月一日発行・110～116頁・「創作」欄

『女性』(博文館、昭和十七年六月三十日)に、全文収載された。

『太宰治全集第七巻新ハムレット(近代文庫122)』(近代文庫、昭和三十年十一月十五日)に、全文収載された。

〔同時代評〕伊藤整、平野謙「対談文芸時評」(「文芸」第十巻第三号、昭和十七年三月一日)には、つぎのように記されている。

平野 伊藤さん、「十二月八日の記録」といふのを拝見したのですけ

れども、あれはどういふのですか、随筆なんですか?／伊藤 文芸評論を頼まれたのです。それがあゝいふふう書いてしまったんだが、まア文芸評論としては現在ああいふ形で書いた方がよかつたと思つてゐます。／平野 太宰治もやはり「十二月八日」といふ小説を書きましたね。／伊藤 『婦人公論』ですか。僕はそれは読まないです。

／平野 僕は面白かつたのですが、それとは別に、十二月八日の記録とか、十二月八日といふ表題の文章がこれからも盛んに出て来さうで、ちよつと思ひ付いたことなんでしょうけれども、十二月八日といふことを誰も「一二・八」といふふうには呼ばないですね。／伊藤 あゝさうですね。／平野 何んといふのですかね、二・二六とか、五・一五とかいふふうに一二・八と呼ばなくて、みんな十二月八日とハッキリ言うのは、大変目出度い事だと思つたのですがね。あれは西暦千九百二十八年を一九二八と書きませう。さういふところから来てゐるんじゃないかといふ気がふつとしたのです。つまり西暦でものを考へる思考法と密接に群関してゐるんぢやないかという気がしましたのですけれども……。／伊藤 それに二・二六といふと悲しいし、三・一五とかいふのは、何んだか忌はしいやうなさういふ感じがするでせう。あまり都合の好くない事柄といふ感じがするが、今度のは……。／平野 もつとカラリとしてゐて、それで一二・八といふふうには云はないのは、僕はやはり目出度いことだと思つたのです。だけど、十二月八日といふことをすぐ太宰治みたいに小説体にするといふことは、あれはどうでせうか? つまり、十二月八日で日本の現実がガラッと変つたといふことは、それは明かな事実だと思ふけれど、日本全体の姿が

変つたほど人間の心といふのは変り難いし、変らないのぢやないかと思ひますね。十二月八日といふのを、一つの区劃りにしてそこに意味をもたせてすぐ書くといふことはどうですかね。何かさういふ事をちよつと感じたのですが、太宰氏の小説そのものは面白いことは面白かつたのですけれども、やはり普段の太宰治まるだしで、そこにギャップが感ぜられる気がした。／伊藤 上林君の書いたのは、読んだのですがね。(歴史の日) 僕はあれでいいと思ひました。しかし、まア自分の事を云ふと、十二月八日で変つたといふ——変らうとする意志を有つたといふことがありますね。小説にあゝいふ起つた事をすぐ撮り入れるといふことですね。気になりますか？(後記——これは私小説についての問題だけれども、私達の生活が国民全体の生活の中に合体するといふ今の状態は、文学の大きな変化をもたらすと思ふ。特に私小説は、物語小説とちがつて、詩や評論のやうに作者の人間的責任が作品にぢかにつながつてゐる。現在のやうな時、作者の国民的な感情が直接作品に現はれることは、私小説に関する限り、当然のやうに思ふ。平野君は作品の内容について言つてゐるので、私と話が食ひちがつてゐる。私小説のかういふ性格については『知性』三月号に自分の意見をまとめて書いた。)／平野 気になるときと、気にならないときとあるんです。「十二月八日」といふ題材は太宰治が一等はじめに書いた気がするのです。それで題に牽かれて読んでみて、何か背負ひ投げを喰つたやうな気がちよつとしたのですがね。(中略)／平野 一般に、いはゆる芸術的才能といふものは、非常に先天的なもので、あの人は才能が無いとか、あの人の才能は大したものとか、固定的に

考へる傾きがある。それと対比して、例へば人間の誠実さといふやうなものは努力次第で出来上るといふふうに一般に考へられてゐるのですけれど、実はそれが逆でないかといふことを、たしか古谷綱武が書いてゐましたが、あれは古谷氏らしい卓見だと思つて覚えてゐます。／伊藤 僕も、十年位前に考へてゐた文学的才能といふものについての考へを改めたのですよ。しかし、上林君にたいして註文を付けると、さういふ誠実さとか真剣さでやつてゐる文学にはまたその文学の限界がありますね。／平野 以前に上林さんの作品批評をちよつとした、どうもミミクテ遣り切れぬといふやうに。それを気にされたらしくつて、文学に於けるミミツチさ論を上林氏が書いてをられて、大へん恐縮したことがあるのですがね。(笑声) 生粹の私小説家といふのは上林氏一人ですね。本当に生粹といふ気がしますね。あとはみんなデフォルメしてゐる。／伊藤 太宰君でも尾崎一雄君でもさういふ感じだけれど、何か作家といふものは、文学評論的な筋道から成立してゐないと思ふんですけれどね。自分の表現する方法がある時ヒョツと見付けて、そこから作家は存在し始めるやうな感じがするんですけれど、だからさういふスタイルといふか、さういふふうなものを有つていない人は興味がないんですね。／平野 しかしさういふのは、又作家の一つの陥穽にすぐ転化するんで、それだけに縋つてゐるとやつぱり困るんぢやないんですか？

〔付記〕「目次」には、「短篇 十二月八日……(深沢紅子画)……太宰治」とある。

律子と貞子・若草・二月号、第十八巻第二号・昭和十七年二月一日発

行・「小説」欄

『風の便り』（利根書房、昭和十七年四月十六日）に、全文収載された。

『太宰治全集第七卷新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二十八日）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌未見。所載頁未詳。

一問一答／三十歳の辯・芸術新聞・第五百六十一号・昭和十七年四月十一日発行

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、「一問一答」の題で収載された。

〔付記〕所載面未詳。

あとがき・風の便り・利根書房・昭和十七年四月十六日発行・289頁

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、『風の便り』あとがき」と題して、全文収載された。

〔同時代評〕無署名『風の便り』（短篇集 太宰治著）（三田文学）第十七巻第七号、昭和十七年七月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治もよく本を出す。一般読者から、この人の作品は一体どういふ風に評価されてゐるか、興味がある。とも角、丹羽や石川や阿部知二などの著作に比すれば、版を重ねることは、あまりないかも知れないが、確実に、一定数の愛読者を擲んでゐることは疑ひない。本書には、新作風の便りをはじめ、新郎、誰、畜犬談、鴉と彼独特の私小説に、旧作猿面冠者の外律子と貞子、地球図の作品をあつめたもの。風

の便りは、虚構の彷徨に一脈の関聯を有するかなり長い作品である。

今更乍ら、作者の「虚構」の度胸に舌を巻かざるを得ない。決して高度の文学的価値とか鋭い文学精神の成果とかの讃辞を呈しようとは思はぬが、すくなくとも今日の夥しい小説集中にあつて、われわれの隙をねらつた短刀のひらめきを見せる点に於て一異彩たること、天晴れなものである。「鴉」は佳作である。云ひたいだけのことを（これは相当に意味ぶかいことなのだが）先づ遠慮なく云つてゐる。この告白の悲痛さは、むしろ、絶望的である。そして絶望的ならざるが為に動かうとする気配の窺はれぬところに、われわれはひとつの矛盾をおぼえるが、とまれ、文学は哲学学ではない。倫理ではない。作者のむき出しな姿に、読者はある安堵を与へられはしないか。まだ、この世に「真実」がのこされてゐるといふ安堵を。

〔付記〕末尾に「十七年、節分の夜。」とある。

水仙・改造・五月号、第二十四巻第五号・昭和十七年五月一日発行・創作14／創作26頁・「小説」欄

『日本小説代表作全集9（昭和十七年前半期）』（小山書店、昭和十八年一月二十日）に、全文収載された。

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『水仙（文芸春秋選書4）』（文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第七巻新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二

十八日)に、全文収載された。

序・老ハイデルベルヒ・竹村書房・昭和十七年五月二十日発行・4〜5頁

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、『老ハイデルベルヒ』自序』と題して、全文収載された。

〔同時代評〕無署名『老ハイデルベルヒ』(小説集)太宰治(三田文学)第十七巻第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

「兄たち」「愛と美について」「新樹の言葉」「老ハイデルベルヒ」「おしやれ童子」「八十八夜」「秋風記」「短篇集」「俗天使」「花燭」。これ等の目次を一瞥したとき評者はちよつと腹立しい気持であつた。これらの短篇小説を二度も三度も読んだのは評者ばかりではあるまい。これ等の片々たる短篇を幾度も再録するふてぶてしさに腹が立つたのである。しかし役目柄いやいやながらも読み返さねばなるまい。／＼ところで二頁も読むか読まないに評者はすでにこの敗残の美学の虜となつてゐるしまつである。けれども、読後の印象はどうあらうか。／＼白状すると評者はすつかり混乱に陥入つてゐるのである。繰返すまでもなくこれらの短篇のあざやかに表現してゐる美しさ、美的価値についての評価はすでに完了してゐる。ただ、この敗残の美学から生れでるべきものの因子が引出せるであらうか、どんな子が生れるであらうかが頭を悩ますのである。／＼太宰を自我の系譜に於て葛西善蔵とのつながりのうちに見れば問題はないが、鷗外、芥川、太宰と知性

の一聯の系譜をつくれれば、太宰はまさしく家を売る三代目の感がありはしないであらうか。／＼芥川は、遂に敗れたけれど知性をかざして闘つたのである。太宰はそうした芥川の敗残の死灰の中から生れたと云つてもいいであらうが、彼は何によつて生きやうとしてゐるのであらうか。／＼太宰は、「晩年」によつて発足したことによつても知られるやうに、その才能に対する自負と否定との相剋の中に、自意識の過剰に、出発してゐる。そうした彼のあり方は、芥川と一体のものの表裏をなしてゐるやうにすら見える。ただ、芥川はつひに神も、美も信じやうとしなかつたが、「晩年」によつて死に切れなかつた太宰は、美と神を常に信じやうとしてゐる。彼の歩みの中には、美へ、神へ歩まうとする意志が見られる。しかし彼は果してしっかりとそうした方向へ歩いてゐるであらうか。また彼の歩みの中に、今日の我々の再生の歩みがあるであらうか。

〔付記〕末尾に「昭和十七年桜の頃」とある。

正義と微笑・正義と微笑(新日本文芸)・錦城出版社・昭和十七年六月十日発行・1〜252頁

『正義と微笑』(弘文社、昭和二十二年二月二十五日)に、全文収載された。

『正義と微笑(青春文庫3)』(永晃社、昭和二十二年十一月一日)に、全文収載された。

『正義と微笑』(弘文社、昭和二十三年十一月二十五日)に、全文収載された。

『太宰治全集第八巻正義と微笑』(八雲書店、昭和二十四年十月三十

一日)に、全文収載された。

〔同時代評〕河上徹太郎、亀井勝一郎「対談新著評論―正義と微笑(太宰治)―」(『文学界』第九卷第八号、昭和十七年八月一日)には、つぎのように記されている。

河上 ざつくばらんに言つて、太宰といふ人は、大作家か、小作家かといふことを、先づ考へると、やつぱり絶対に小作家なんだね。井伏鱒二、太宰治、申中英光……と来たものが小作家の系列なんだ。小作家といふのは別に輕蔑ではなく、小作家でなくつちや、カチツと受止め兼ねるものが現代の小説の中にあるのだよ。だから小作家が現代では非常にしつかりしてゐるが、大作家は皆んなふやけてゐる。つまり最小限度の現代の誠実さ——といふものを保存する役がやつぱり小作家に委されてゐるんだと思ふね。太宰といふ人は、若いゼネレーションから受けてゐる作家で、その若いゼネレーションの批評をきくと、『太宰君程言ひたいことの言へる人は羨しい』と云ふんだが、これ絶対に間違ひだと思ふよ。それは太宰の間違ひではなくて、愛読者の間違ひだ。太宰はそんなに言ひたいことを言つてゐる人ではなく、小作家の最後の皆で文学精神といふものを受止めてゐる大事な人で、言ひたいことを言ふなんて、そんな告白だの叙述だのテを拵げてゐる人ではないんだ。井伏鱒二亦然りなんだ。此の「正義と微笑」は、十六歳から十八歳迄の青年の私といふもので貫いてゐる日記体なんだ。之を読んで僕は面白かつた。然しこれを読んで現代の十六から十八までの青年が解つた訳ではない。寧ろ太宰君が解つて面白かつたのだ。／亀井 太宰君の「正義と微笑」は夏目漱石の「坊ちゃん」に

あたるのだよ。「坊ちゃん」は漱石が四十歳近くやつて書いた云はゞ大人の作品で、その時の二十代のゼネレーションなどとは違ふ純乎たる反俗の宣戦だつたのだ。夏目漱石より太宰君の方が遥かに苦渋を湛へた、つまり近代の「坊ちゃん」なだけけれど、今の十六から十八迄の青年といふものでないのは君の云ふとおりだ。僕がいつも太宰君の作品に感じるものは、捨身の反俗精神なんだ。自分の内と自分の外にある俗にぶつかつて傷ついたといふ、感受性の犠牲者ともいふべきものが太宰君の根本にあるのだよ。敏感に感受して、その為に傷を受けて、その傷をまともに表現して行つた、それも所謂心境的ではなくて背景は随分ひろい。つまり我々が経過した一九三〇年代の青春といふものを一番見事にあらはした人なのだ。大体左翼が崩壊して末期現象を呈して来た頃の、八方破れの心さ。「新ハムレット」といふ作品は良くて悪くても、さういふ時代の青年を極限までかきつくしたといふ意味でこれは典型なんだよ。／太宰君の小説を読んで、いつも想出すのはロシヤのアンドレーエフといふ作家だね。アンドレーエフの言葉の中に『病める貝殻の裡にのみ真珠は生れる』——といふ言葉があるのだよ、病める精神だ。さういふ精神を人工化してまで真珠を生まうといふのだよ。／あなたが言つたやうに、井伏の系統だといふのはたしかにそのとおりだ。井伏さんが俗に在ながら俗に染まらない純乎たる抒情を有つてゐるのに対して、太宰君の場合にはそれがもつと尖鋭に意識化して来て信仰といふかたちになるのだ。太宰君のどの作品を読んでも必ず聖書の言葉が出て来る。「正義と微笑」を読んでみても、結論としては、清らかな神の子を描いたといふ感じがするのだ

よ。／河上 だけれど、「正義と微笑」の主人公が、今眼の前に現実に現れたならばこんな人間は僕は絶対に嫌ひだね。太宰君が普通名詞でいふ正義と微笑を表現するのに、かういふ人物に托した所に非常に太宰の人工性といふものがあると思ふのだよ。誠実といふものが自然発生的な素朴さを意味するとしたら、太宰は反対の人で決して素朴な人ではない。ボードレールの言ふ人工的な人で、要するに太宰という人は大法螺吹なんだが、その裡で何か自分の誠実さを洗ひ浄める念願があるのだよ。／亀井 そこがつまり太宰君の本質なのさ。大法螺吹にはちがひないけれど、同時にその大法螺の罪は俺が担ふ——といふものがあるのだよ。どんなに人工を弄したつてその本性を隠しきれないでゐるところがつまり太宰君のもつ懐しさなのだ。上手に化けたつもりで非常に大きな尻尾を出してゐるよ。／河上 先日酒間に太宰君は面白い言葉を吐いた。僕がウチの犬の話したら、太宰君は言つたのだ。『犬つて奴は実に可愛い奴だ。夜更の三鷹のプラットホームのコンクリートの上を、爪を隠すことができないので、コツコツ爪の音を立てながら自分の主人を迎へに歩いてゐるんだ』——あらゆる太宰文学の中でも、こりや美しい言葉だと思ふよ。所が太宰はねえ、彼自身実は爪を持つてゐないんだ。そこで義爪で夜更の三鷹のプラットホームの上を音を立てゝ歩く奴だよ。そこでもつて犬の誠実さを人工的に表現してゐる人間なんだ、さういふ人間なんだよ。／亀井 うん。まあ読者はいろ／＼に解釈するだらうけれど、いま君の言つたことは太宰君自身よく知つてゐる。「風の便り」といふ作品を読めばわかる。あの中に太宰君の人工に淫する苦しみといふものはよく出てゐるのだ

けれどね、つまり作品の上では人工の人だけれど、それを一々痛い——と言つてゐる。さういふ痛さを身にしみて感じてゐる人だよ。／河上 さう。だから日本の文壇といふ側から観て、日本の文壇が太宰治を生んだといふことは、文壇としちや、窮余の一策だけれど、生れた太宰治に取つちやかけがへのないことなんだ、さういふ悲劇があるんだよ。昭和十何年の日本文学が太宰治を生んだつてことは、何だらうね？／亀井 つまり小説の滅亡——小説の最後の人といふやうな言葉で云へないか。／河上 うん。／亀井 太宰君の作品とともに僕がいつも同感してよむ小説は高見順君のものなのだ。つまり自然主義から白樺の時代、新感覺派や左翼文学の時代とめぐつて来て、日本の現代小説は一つの極点に達して頽廢をはじめた、さういふ最後のところに置かれた小説家の苦惱をいちばん味はされてゐるところに太宰や高見君の苦衷があるのぢやないのかな。いままでの小説体を毀して行く最後の人であり、また何かの最初の人であるかも知れないのだよ。／河上 然しさういふ場合の毀すといふことはその仮建設にも通じるのだよ。だけど、僕は太宰には毀すものも建設もないやうな気がするな。何かある一状態のやうな、……さうだ、優曇華の花みたいな気がする。／亀井 さうかなあ。／河上 井伏だつて、毀しも創りもしないよ、ありア、優曇華の花だよ。／亀井 しかし太宰君の場合は、もつとセチ辛いものがあるよ。非常な意識家なんだ。井伏さんのやうな和やかな表現とは違ふ、何と言つたらいいか、恐ろしく強靱な根つこをもつた人だからね。／河上 まあ、太宰君も日本浪漫派の通有性としてダンディズムを持つてゐるが、こりや、やつぱり別のかたちで、

今月論評の五人が皆有つてゐるね。

内海伸平「太宰治論」(「赤門文学」第二巻第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

太宰をどんなふうに論じてゆかうかと困り果てた所で、近作「正義と微笑」を読む。大変楽しく読んだ。それが何よりも私には嬉しかった。薄汚い身上で終始してゐる私小説。歴史小説とレッテルを貼つたおかげで動きのとれなくなつた客観小説。それやこれやでちつとも面白くなつた此の頃の小説。既に読む気はしない。そんな中では太宰の小説はともかく面白い。楽しい。若さがある。「正義と微笑」のよさも、その一点につきる。健康な青春文学と云へよう。而も之が近代文学の最後の青春文学になるのではないかと思ふ。淋しい話である。

あとがき・正義と微笑(新日本文芸・錦城出版社・昭和十七年六月十日発行・253頁)

『正義と微笑』(弘文社、昭和二十二年二月二十五日)に、全文収載された。

『正義と微笑』(青春文庫3)(永晃社、昭和二十二年十一月一日)に、全文収載された。

『正義と微笑』(弘文社、昭和二十三年十一月二十五日)に、全文収載された。

『太宰治全集第八巻正義と微笑』(近代文庫127)(創芸社、昭和三十年九月五日)に、全文収載された。

〔付記〕末尾に「昭和十七年陽春」とある。

甘口辛口・現代文学・七月号、第五巻第七号・昭和十七年六月二十八日発行・3頁・「甘口辛口」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦』(近代文庫23)(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、「無題」と題して全文収載された。

〔付記〕「無題」で「甘口辛口」欄に発表された。

待つ・創作集女性・博文館・昭和十七年六月三十日発行・283頁

『太宰治全集第七巻新ハムレット』(八雲書店、昭和二十四年二月二十八日)に、全文収載された。

〔付記〕末尾に「(十七年一月)」とある。

「京都帝国大学新聞」の「依頼に応じて」執筆、「昭和十七年三月掲載予定のコントとして」送稿されたが、「内容が時局にふさはしくないとの理由」で掲載されず、新聞雑誌等には発表されなかった。

あとがき・創作集女性・博文館・昭和十七年六月三十日発行・291頁

『太宰治全集第十巻』(筑摩書房昭和三十一年七月二十日)に、「女性」あとがき」と題して全文収載された。

〔付記〕末尾に「昭和十七年春」とある。

小さいアルバム・新潮・七月号、第三十九年第七号、通巻四百五十四号・昭和十七年七月一日発行・122頁・「創作」欄

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十一月二十日)に、補訂をして全文収載。

『太宰治全集第七巻新ハムレット』(八雲書店、昭和二十四年二月二十八日)に、全文収載された。

〔同時代評〕浅見淵「文芸時評」(「都新聞」昭和十七年六月)には、つ

ぎのように記されている。

今月号で一応読み応へのあつた作品は、最初に挙げた、壺井、保高の二作について、太宰治の「小さいアルバム」(新潮) 白川渥の「虚園」(新潮) 野村尚吾の「岬の気」(文芸) である。／太宰治の作品は散々書き古した題材を、又別の角度から描いて新しい趣を出すと共に、一種の流麗さを示してゐるのだ。／その流麗さに以前あつたトゲの支へがなくなつたことと、書き慣れて題材が水つぽくなつて来たことに嫌りぬものを覚えるが、兎に角、この才気は珍らしいものである。

佐々三雄「文芸時評」(「早稲田文学」第九卷第八号、昭和十七年八月一日) があるが、いま手元に見当たらない。

岩上順一「文芸時評―進路への展望」(「日本評論」第十七卷第九号、昭和十七年九月一日) には、つぎのように記されている。

今日の私小説が、激流にさらされた知識人の自己確証のねがひから生れたものであることは、私小説にとつては一つの再生であつたかもしれぬ。日常生活の継続性のなから、歴史的事件の飛躍性を描きだすことは、もとより、それによつても可能であらう。しかし今日の私小説のなしたげた実体は、はたしていかなるものであらう。私は、私小説が単一な線をたどつてゐるとはおもはない。上林曉の「冬の栖」や、太宰治の「新郎」「小さいアルバム」や、坂口安吾の「真珠」や、伊藤整の得能物のつづきは、それぞれ相異つてゐる。しかも彼等にとつて特徴をなしてゐるのは、彼等がひとしく、自己の生活をできるだけ外界の激動にむすびつけようとしてゐることだ。十二月八日は彼等

にとつてもつともはげしい感動をあたへた。あまりにはげしいために、彼等の足を大地からうきあがらせた。これらの私小説が、自己を語るがごとくみえながら、決して真実の自己を批判し解剖するものではないことはすでにしばしば語られた。自己確証への意欲は、しばしば安易な自己の小主観への陶醉におちいる。私小説の一つのコースがここにある。

小照・新日本文学全集月報第十六号・改造社・昭和十七年七月十三日発行。1と2頁

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日) に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日) に、全文収載された。

〔付記〕『新日本文学全集第十四巻坪田譲治集』(改造社、昭和十七年七月十日初版印刷／昭和十七年七月十三日初版発行)の附録。月報の標題の下には、「(昭和十七年六月配本／第十六回配本附録)」とあるが、月報の終りには、「昭和十七年七月十日印刷・昭和十七年七月十三日発行」とある。第十七回配本『新日本文学全集第十巻井伏鱒二集』(昭和十七年九月一日発行) のための文章。

私の好きな詩と言葉・文芸・八月号、第十巻第八号・昭和十七年八月一日発行・50頁

『太宰治全集第十巻』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日) に、全文収載された。

〔付記〕アンケート回答。

炎天汗談・芸術新聞・昭和十七年八月

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕未確認。号数、発行日、所載頁等未詳。

天狗・みつこし・9月号・昭和十七年九月一日発行・6～7頁

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕「四百字話の原稿用紙二十枚」に記したもの。

花火・文芸・十月号、第十巻第十号・昭和十七年十月一日発行・125頁

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「日の出前」と改題して全文収載された。

『太宰治全集第八巻正義と微笑』（八雲書店、昭和二十四年十月三十一日）に、「日の出前」の題で全文収載された。

〔同時代評〕麻生種衛「文芸時評―片隅から―」（『新潮』第三十九年第十一号、昭和十七年十一月一日）には、つぎのように記されている。

「花火」（太宰治、文芸）も注目すべき作品の中に入れてよいかも

知れない。この作者の天才的？な饒舌に対して僕は云ふべき術を知らない。しかもそれでゐて、それがちゃんとした形象をなしてゐるのだから、この饒舌はただのものではないのであらう。

〔付記〕初出誌の「編輯後記」には「★創作は、立野信之氏の「旅順紀行」、大谷藤子氏の「堀」、太宰治氏の「花火」井上友一郎氏の「孫逸仙の扇」の四篇である。短篇とはいへ、各作家の特色をよく表示した逸品である。」とある。発行後、「花火」は、「戦時下に不良の事を書いたものを発表するのはどうか、といふので」全文削除された。初刊本に収載の際、「日の出前」と改題。

文盲自嘲・琴・第一輯・昭和十七年十月

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕未確認。発行日、所載頁等未詳。昭和十五年十一月に発行される予定で執筆されたもの。

禁酒の心・現代文学・新年号、第六巻第一号、「特輯／傑作短篇二十人集」・昭和十七年十二月二十八日発行・6～9頁

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第八巻正義と微笑』（八雲書店、昭和二十四年十月三十一日）に、全文収載された。

故郷・新潮・新年号、第四十年第一号、通巻四百六十号・昭和十八年一月一日発行・103～115頁・「創作特輯」欄

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第八卷正義と微笑』（八雲書店、昭和二十四年十月三十一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕中谷孝雄「文芸時評―読後の印象」（『新若人』第四卷第二号、昭和十八年二月一日）には、つぎのように記されている。

読んだ作品の三分の一も語らないうちに紙数が尽きてしまったが、新潮の太宰治氏の「故郷」や、文芸日本の緑川貢の「白系オリヤ」に就いては、言ひ度いことが残つてゐる。だがこれらの作家の作品に就いては、来月にでも触れる機会が必ずあることゝ思ふ。

黄村先生言行録・文学界・新年号、第十卷第一号・昭和十八年一月一日・134～151頁・「創作」欄

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第八卷正義と微笑』（八雲書店、昭和二十四年十月三十一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕宮内寒弥「文芸時評―或る暗示」（『新潮』第四十年第二号、昭和十八年二月一日）には、つぎのように記されている。

自分が狭量でゆとりのないせるとも反省するが、どうも、擬人法の小説はついて行けない。致し方がないのである。／そして、又、擬人法に限らず、例へば、太宰治氏の「黄村先生言行録」（『文学界』のやう

な小説も、偶然にも岩倉氏と同じ井の頭動物園のこれは山椒魚のことを取扱つた小説であることは別として、随分面白をかしい筈の小説であることはよくわかるのであるが、しかし、作者は才気によつて、その面白さを売り込んでゐるやうな、面白がる読者の顔を先に心得てゐるやうな、そして、どことなくふざけてゐるやうなところがあつて、折角の小説でありながら、そのユウモアを解する境地に至ることが出来なかつた。はつきり云つてしまふと、一寸、嫌な気持であつた。私は、太宰氏のものでは以前の「畜犬談」などから、これに至つてゐるユウモア物はどうも好きになれない。

序・富嶽百景（昭和名作選集②）・新潮社・昭和十八年一月十日発行・1～2頁

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、「昭和名作選集『富嶽百景』自序」と題して、全文収載された。

〔同時代評〕亀井勝一郎「解説」（『富嶽百景』新潮社、昭和十八年一月十日）には、つぎのように記されている。

日本の文人たることは日本の殉教者たることである。とくに現代作家にとつては、日本の運命について深思し、精神の将来について不斷に憂ひと光明をもたねばならぬのみならず、一方では極度に發達した小説といふ形態の行方に関しても、人しれぬ労苦を経験しなければならぬといふ、二重の意味での困難が横つてゐる。／明治の自然主義文学にはじまつた現代小説の道が、大正から昭和に至つてその絶頂に達し、やがて爛熟頹敗の現象を呈しつつあることは萬人の了知するとこ

ろであらう。小説が技術としても一の完璧に達したといふことは、同時にそのいちじるしい普及と俗化を伴った。今日では、何びとでも、筆をとつて「描写」さへすれば作家と呼ばれるやうな時代となつたのである。文学者に本質する反俗の魂はいつしか地に墮ちた。むろん小説の反省と革新の試みはつねにくりかへされて來たし、この十數年にわたる思想の昏迷とむすびついて、詩も小説も評論も、不斷に新しい境地を求めて彷徨つたことは、改めて説くまでもなからう。我々は外的にも、文学の上でも、実に激しい困迷を経てきたのである。明治大正の達した小説の頂点は、なほ覆へることなく今日に及んでゐるが、しかしこの完成の後をうけて、新に小説の筆をとらねばならぬ人の苦衷はいかばかりであらうか。現代において敢へて小説をかくといふことは一の受難である。受難なるが故にまた再生の祈念ともならうか。／徐々に、小説は小説といふ名目のもとに解体して行く傾向を辿りはじめた。善い意味でも悪い意味でも。自壊作用が始まつたのである。小説の危機は幾度か叫ばれた。文学のこの形態は今後どうなるのだらうか。鋭敏な作家ほどこの苦衷に身を投じ、様々の実験に身を委ねた。あるひは現代における眞の文学精神の所在を求めて筆を折り沈黙をまもつた。／私が殊更かやうな前置きを述べたのは、太宰治君の文芸に志した日は、まさにこのやうな苦悩の日であつたことを、せめてその片鱗だけでも言ひたかつたためである。時代については詳述するまでもない。小説の道に關してだけ考へても、太宰君は或る意味で、小説がなほ文学の真面目を失はなかつた日の、最後の人であるかもしれない。そして同時に、何ものかの最初の人であるかもしれぬ。受難

の刻印は免れないであらう。太宰君はかうした過渡の昏迷を人一倍鋭く感じ、自覺し、沈思しては狂乱のごとき表現をもつて訴へた人なのだ。／この創作集を読む人は、おそらく第一に作者の感受性の鋭さに向たれるであらう。誤解してはならない。感受性の鋭さとは、世に謂ふ感覺の新鮮さとか、よく氣がつくとかいふことは違ふ。太宰君にあつてはそれは峻厳で潔癖な倫理の問題なのである。むしろ倫理をすら超えた信仰の問題なのである。太宰君は何に怒り、何に悲しんでゐるのか。彼の感受性は実に傷つき易いのであるが、深傷を受ければ受けるほどその復讐は大きい。云はば感受性の犠牲者たることによつてはじめて俗世に逆襲するのだ。身を殺して仁を為す。そこに太宰君の強烈な反俗精神と眞の面目がある。押しつめられた絶体絶命の境まで行かなければ、彼の闘魂は完璧に燃えあがらぬ。弱さのもつ勁さ云々ともいいであらうか。これは多くの文学者に個有な性格でもあるが、太宰君の場合は全相貌が露呈し、それがそのまま芸術的表現となるのである。／太宰君の感受性は信仰にまで高まつた峻厳さをもつと云つたが、それはただ俗を撃つのみではない。同じ強烈さをもつて自分自身にも刃は向けられる。反省力の強さなどといふものではない。一口に云へば罪惡感の深さである。太宰君ほど俊敏に俗を嘲弄しながら同時に罪の意識を大胆に述べてゐる作家は少い。作品のいたるところに、様々の人物を仮りて、当代のパリサイ人が断罪されてゐるのを読者はみるであらう。同時に、作者の深奥の呻吟を聞くであらう。自ら自らを断罪した人の慟哭を聞くであらう。／太宰君の所謂饒舌とは、饒舌ではない。物語作者としての稀有の手腕もさることながら、

むしろ彼の深奥の祈りを奏でる音楽——いくつかの絃と管の合奏であつて、根源にあるものは一筋の端的卒直な祈念にすぎない。反俗の魂と罪の意識と、これが形成する精神の葛藤——地獄と云つてもいい——そこからのひそかな、唯一途の祈念をみないものは太宰君の作品の真価を解しえぬであらう。太宰君は卒直な人だ。一筋の人だ。そして潔癖な魂の人である。この無類の純粹性が、自己の内と外の俗を自覚したときの驚嘆や悲哀や沈思を、絃とし管として、あの独自の文学を生むのである。燃焼の極点で、小説の解体を意とせぬ、野放図の表現を試みる。／太宰君の作品が、或るところは感想風であり、また或るところは思想の独白になったり、對話になったり、随筆風だったり、さういふ変化を辿つてゐるのは、いままで述べたごとき感受性の鋭敏に由ることはむろんであるが、また一方では、現代で小説をかくことの苦衷をまざまざと示してゐるとも云へよう。それが畢竟何処へ行くか。もとより私にはわからない。太宰君にもわかるまい。彼の精神が様々の試みに遭つたやうに、その小説といふ形態もまた様々の試みに遭つてゐるのだ、さう私は思つてゐる。しかしどんな試みに遭はうとも、太宰君を私は信ずるのである。何故か。彼は最終において「神の心のままに」と祈りうる人だからである。人事をつくして天命をまつといふ言葉があるが、太宰君は人事の極限に天命の存在を知つた人である。いかなる苦杯をも飲むだけの真の勁さはそこから生ずるにちがひない。この創作集をひとく人は、飛躍的で多彩な表現をとほして、如上の姿をみてほしいと思ふ。

〔付記〕末尾に「昭和十七年冬」とある。

序・桜岡孝治著『馬來の日記（まはろば叢書）』・大日本百科全書刊行会・昭和十八年二月

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、「桜岡孝治著『馬來の日記』序」と題して、全文収載された。

〔付記〕未確認。発行日、所載頁等未詳。末尾に「昭和十七年初秋」とある。

鐵面皮・文学界・四月創作特輯号、第十巻第四号・昭和十八年四月一日発行・47～59頁・「創作特輯号1」欄

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、訂正して全文収載。

『太宰治全集第九巻右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

〔同時代評〕岡田三郎、高見順、伊藤整「四月の小説―鼎談月評―」（『新潮』第四十年第五号、昭和十八年五月一日）には、つぎのように記されている。

高見（前略）「石塚氏ので感心したのはかういふテーマだといふと今迄変に所謂自虐趣味といふか、自分をそれ以上にいぢめて見たり、いぢけて見たり、或はいぢけるやうな顔をして誇張して売物にしたり何かさういふものが出勝ちですれども、さういふものを書かなかつたといふことではなく、書くことは書いてゐて嫌味のない、かなり充実させて書いてゐるといふことで僕は感心します。太宰君のは何かいやでした。／伊藤 太宰君変りましたか。／岡田 最も悪いところが

出て来てゐる気がしましたね、尤も「鉄面皮」を書いてゐるのだから
テレた方がいいと思つたつて、向ふが承知して書いてゐるのだから、
どうも勝手に註文を出しやうがない。／高見 この形といふのは……
太宰君といふものは好きです。かういふ形といふものは太宰君の戦ひ
であつたと思ふが、今や戦ひでなくなつて来て、失礼な言ひ方かも知れ
ないが、かういふ形のことを言ひ出せば、出すところに何でも入れて
しまふのだ、さういふことになるのですね。

平野謙「専門家とディレッタント」(「日本読書新聞」昭和十八年四
月十七日)には、つぎのように記されている。

創作では石塚友二の『十年』(文学界)、室生屋星の『若い牛』(同
上)などに辛うじて今日の文学者魂の片鱗をみた。長見義三の『傷
手』(新潮)、森山啓の『水の音』(同上)、真杉静枝の『雪』(文学界)
など力弱い感銘しか得られなかつた。太宰治、新田潤らにいたつては
それぞれ身についた技法だけで安易に小説を書いてゐるにすぎない。
〔付記〕初出誌巻末の舟橋聖一「文学界後記」には、つぎのように記さ
れている。

去年の秋、米子や松江の方へ、報国講演の旅に出たとき、同行の河
上徹太郎と、途すがら小説復興論をやつてうちに、来年の四月頃特
輯号を君が世話して出せといふ話になつたのが、ともかく実現したの
である。／慎重を期するために、この正月、中堅作家に檄を寄せて、
執筆の志を契るための顔合せをやり、その後も時々激励の文を書きお
くつたが、その中、志を契つた人が全部書いてゐるといふわけではな
い。これによつても、雑誌記者の苦心の並大抵ならざることが、わか

つたが、同時に、小説といふものが、いかに六ヶしいものかといふこ
とを、自他共に、大いに考へさせられるわけだ。雑誌記者的外聞に拘
泥せず、当夜、集つた顔触れをいふと、書いた人のほか、川端、中
山、横光、宇野(千)、阿部(知)などがゐるが、彼等もこの会に来た
処を見ると、書く気は大いにあつたのであるが、残念ながら、思ふに
まかせなかつたのであらう。

赤心・新潮・五月号、第四十年第五号、通巻四百六十四号・昭和十八年
五月一日発行・100頁・「辻小説」欄

『辻小説集』(八紘社杉山書店、昭和十八年七月十八日)に、全文収
載された。

『如是我聞』(新潮社、昭和二十三年十一月十日)に、全文収載され
た。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十
七年七月一日)に、全文収載された。

歸去來・八雲・第二輯、「小説戯曲篇」・昭和十八年六月十五日発行・207
〜233頁

『佳日』(肇書房、昭和十九年八月二十日)に、全文収載された。

『黄村先生言行録』(日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日)
に、全文収載された。

『太宰治全集第八巻正義と微笑』(八雲書店、昭和二十四年十月三十
一日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕「本年最も感銘を受けた文学作品ほか(回答)」(「文芸」第
十一巻第十二号、昭和十八年十二月一日)の渋川驍と上林暁との「三、

本年最も感銘を受けた文学作品。」の回答には、つぎのように記されている。

渡川驍／三、今年はまだ雑誌を読まなかったので、狭い範囲になりますが印象に残つたものを列挙すると、川崎長太郎氏「落穂」、高見順氏「ノーカーナのこと」、太宰治氏「帰去来」、恒松恭助氏「義齒の感情」、大内直通氏「季節抄」、直井潔氏「清流」、井田誠一氏「望郷」等です。

上林暁／三、「東方の門」「細雪」が圧倒的だった。太宰氏の「帰去来」は涙を流して読みました。

無署名「太宰治著『佳日』」（「日本読書新聞」昭和十九年十一月一日）には、つぎのように記されている。

八雲第二輯に載った「帰去来」を巻頭に十篇より成る短篇小説集。いづれもつましく明るくとの作者の希ひの溢れた好ましい作柄。戦意の昂揚が必ずしも不平不満を絶滅させてゐないこんな厳しい世相であるだけに、この作者の持つ笑ひはいまの大方の読者にすめたいものがある。苦しみを突き抜けて来た作者の掴み得たユーモアは世の万歳芸とは凡そ撰を異にしたたのしみとなぐさみを与えてくれる。

〔付記〕昭和十七年十一月に発行される予定で、執筆された。

わが愛好する言葉・現代文学・八月号、第六巻第八号・昭和十八年七月二十八日発行・17頁・「特輯
随筆わが愛好する言葉」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ草（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、「わが愛好する言葉」と題して収録された。

〔付記〕「目次」の題名欄には「○」とあり、本文題名欄にも「○」と

ある。

若き日の感銘の書・文庫・九月号、第三巻第九号・昭和十八年九月一日発行・34～35頁・「若き日の感銘の書(二)」欄

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房・昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔付記〕末尾に「(小説家)」と記されている。アンケート回答。目次には、「若き日の感銘の書：諸家の回答」とある。

右大臣實朝・右大臣實朝（新日本文芸叢書）・錦城出版社・昭和十八年九月二十五日発行・1～265頁

『右大臣実朝』（増進堂、昭和二十一年三月二十日）に、全文収載された。

『ろまん燈籠』（改造社、昭和二十三年五月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九巻右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

〔同時代評〕亀井勝一郎「本年最も感銘を受けた文学作品ほか（回答）」（「文芸」第十一巻第十二号、昭和十八年十二月一日）には、つぎのように記されている。

思い出すままに次に列挙いたします。／武者小路実篤「美術を語る」／太宰治「右大臣実朝」／舟橋聖一「相撲記」／房内幸成長歌と短歌／神保光太郎「昭和南日本学園」

「歴史文学賞は中沢氏の『阿波山獄党』（「文学報告」第二十七号、昭和十九年六月一日）には、つぎのように記されている。

財団法人奉仕会では本年初頭より屢々委員会を開催し、慎重審査中であつた歴史文学賞、初の授賞作品をこのほど本会々員中沢丞夫氏作『阿波山獄党』と決定し、来る総蹶起大会の席上授賞される。／右は予選委員会に於いて、まず十八年度歴史文学作品全部にわたり充分な検討を加える一方、各方面に千余通の照会状を發し授賞作の推薦を求めた。その結果予選委員会は次の八篇を候補作として銓衡委員会に提出した。／獄中記（山手樹一郎）右大臣実朝（太宰治）筑後川（林逸馬）兵屋記（板東三百）光を揚ぐる人々（徳永直）筑豊炭田（橋本英吉）阿波山獄党（中沢丞夫）梁川星巖（中谷孝雄）／三月二十二日に華族会館で開かれた最後決定となるべき委員会は各銓衡委員が真剣に討議検討した結果、太宰治、板東、林、中沢四氏の著書が同点で残り、座長柳川平助閣下に一任後、遂に『阿波山獄党』と決定したものである。

〔付記〕巻末に「著者の略歴」を付す。

不審庵・文芸世紀・十月号、巻五巻第十号・昭和十八年十月一日発行・34～42頁・「小説」欄

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九卷右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

金銭の話・雑誌日本・十月号、第二巻第十号・昭和十八年十月一日発行・30～31頁・「随筆」欄

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕振仮名付。

作家の手帖・文庫・十月号、第三巻第十号・昭和十八年十月一日発行・12～17頁・「創作」欄

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九卷右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

雲雀の聲・昭和十八年十月末頃脱稿

〔付記〕小山書店加納正吉の慫慂によって書下された小説。昭和十五年夏頃から文通のあつた小説家志望の青年木村庄助の「かなりフィクションをまじえた小説に基づいている」と推定される。木村庄助は、昭和十八年五月十三日、二十二歳で自殺して果てたが、その遺言によって送られてきた日記全十二冊をも参考にしたと思われる。十月末、全二百枚を脱稿したが、検閲不許可を貰い、一時出版を差し控えていた。翌十九年に許可が下り、出版の運びとなったが、発行間際の十二月上旬、神田の印刷工場が戦災に遭い全焼して終った。後の「パンドラの匣」は、映画化を企画した山下良三の許に残っていた「雲雀の聲」の校正刷を基に執筆したものという。

佳日・改造・新年号、第二十六卷第一号・昭和十九年一月一日発行・90
と103頁・「小説」欄

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『黄村先生言行録』（日本出版株式会社、昭和二十二年三月十五日）
に、全文収載された。

『太宰治全集第九卷右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五
日）に、全文収載された。

〔同時代評〕浅見淵「小説月評」（『新潮』第四十一年第二号、昭和十九
年二月一日）には、つぎのように記されている。

扱て、太宰治氏であるが、太宰氏は甚だ個性的臭味の強い作家であ
る。今月は「佳日」（改造）「新釈諸国断」（『新潮』）の二作を発表して
ゐるが、最近の太宰氏はどこかトゲをなくしてゐる感じだ。太宰氏の
ダンディズムは抑々はそれを以て功利的な現実に対抗するところに輝
きを持つてゐるが、最近はその対抗意識が稀薄になり、随つてダンデ
イズムも末梢的なところで光つてゐるきりだ。悪口をいへば黄表紙的
ダンディズムに堕してゐる。そして、それよりも話述者の流暢さに特
色を持つて来てゐる。つまり、巧みな話述の魅力へ、端々に市井的ダ
ンディズムをちらつかせてゐるのが最近の作品の特色である。今月の
二作もさういふ作品である。面白いことは面白いが、作者は自分の才
気を頼んでどこか読者をみくびつてゐるところがある。

澁川驍「新年号の小説」（『文芸』第十二卷第二号、昭和十九年二月
一日）には、つぎのように記されている。

どんな時にでもすぐ座談の中心を占めて、その場を明るく賑やかに

する不思議な人物がゐるものである。私は今月の作品を一通り読んで
太宰治氏にそれを感じた。といふのは彼の作品を読むと、つい何とか
いひたくなるのである。もう大体傾向はわかつてゐるのだから、また
かのつもりで無関心でゐようと思つてゐるのだが、いつの間にかそち
らに視線が向いてしまふといふのはその座談の手振口振があまりにを
かしかったり、腹が立つたりするからである。と思ふと、急に居ずま
ひを正して、しみりした身上話を聞かしてくれることもある。この
前「八雲」で読んだ「帰去来」には感心した。かういふ酔ひ醒めのあ
とのやうな冷静な気持になる時があるのであらうか。今さら見直す感
じがした。そして太宰氏がかういふ世界にすぐ厭氣を出さずに根氣よ
くぶつかつていつたなら大した仕事をしでかすかも知れないぞと思つ
た。ところが案の定もう厭氣がさしてゐるのである。／＼彼は今月「佳
日」（改造）と「新釈諸国断」（『新潮』）とを発表してゐる。「佳日」は
彼の作品で最も類型の多いもので、誇張した身振で読者を笑はさうと
してゐるものである。外で緊張して働いてきた読者には夕飯のあとで
かういふ作品を覗くのは楽しみかも知れない。私もその程度の楽しさ
は感じた。しかしどうも相手を見くびつた言葉がいくつも出てくるの
にはムカムカした。例へば「まことに師の恩は山よりも高い。」など
と二度もいつてゐるが、筆者である「私」がそんなことを本気に考へ
てゐさうにもないことがわかつてゐて、ヌケヌケいふのが、どうも我
慢がならないのである。この「佳日」に較べると、「新釈諸国断」の
方はとにかく骨のある作品である。これだけを読んだと確かに面
白い。西鶴を知らない読者は一応感心するだらう。といふのはこの中

で効果をあげてゐるものは、このテーマの選び方である。ここに新釈と銘打つ所以がなければならない。ところで太宰氏はいかなるところに空想を働かしてゐるのであらうか。青砥藤綱が狡い人足にだまされて家に帰つて来てそれに気がつくのを、八つの娘から勘定違ひを指摘されたことに拠ることにしてゐるが、これだけが西鶴の解釈と違ふところで、他はほとんど同じである。ところで西鶴はこのところをいかに運んでゐるか。「此男はいはねど、自然と青砥左衛門聞きて、其人足をとらへて、きびしく横目をつけ」といつてゐる。自然と藤綱にわかつたといふのは、どこからともなく世の噂話が彼の耳に這入つてきたと解すべきであらう。この方が必然性がある。どうも太宰氏の新釈はまだ西鶴を驚かすところまでは行つてゐないやうである。これでは彼の軽蔑する「西鶴の現代訳」と同じやうなものになつてしまふ。どうせ新釈と銘打つなら新釈らしい才智の溢れたテーマを工夫して空想してもらひたいものである。

「新釋國諸噺」はしがき(仮題)・新潮・新年号、第四十一年第一号、通巻四百七十二号・昭和十九年一月一日発行・49頁・「創作」欄

『新釈諸國噺』(生活社、昭和二十年一月二十七日)の「凡例」の冒頭に、引用の形で収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』(八雲書店、昭和二十四年一月三十日)の「新釈諸國噺」の「凡例」の冒頭に、引用の形で収載された。

〔付記〕「新釈諸國噺」の冒頭に、はしがきの形で付され、無題。

新釋諸國噺・新潮・新年号、第四十一年第一号、通巻四百七十二号・昭和十九年一月一日発行・49頁・「創作」欄

『新釈諸國噺』(生活社、昭和二十年一月二十七日)に、「裸川」の標題で全文収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』(八雲書店、昭和二十四年一月三十日)に、「裸川」の標題で全文収載された。

〔同時代評〕浅見淵「小説月評」(「新潮」第四十一年第二号、昭和十九年二月一日)と、洪川驍「新年号の小説」(「文芸」第十二巻第二号、昭和十九年二月一日)とについては、「佳日」の項を参照のこと。

横綱・東京新聞・第四百六十六号・昭和十九年一月十三日発行・4面・「文化」欄

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十一月二十日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

革財布・日本医科大学殉公団時報・第七十号・昭和十九年一月二十五日発行

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十一月二十日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕振仮名付。昭和十八年七月頃執筆。

「惜別」の意圖・昭和十九年一〜二月頃執筆

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文収載された。

『付記』「惜別」の執筆に当って、内閣情報局第五部第三課および日本文学報国会小説部会幹事会に提出した一文。

散華・新若人・三月号、第五巻第三号・昭和十九年三月一日発行

『佳日』（肇書房、昭和十九年八月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九巻右大臣実朝（近代文庫128）』（近代文庫、昭和三十年九月二十日）に、全文収載された。

『付記』初出誌未見。収載頁未詳。

藝術ぎらひ・映画評論・四月号、第一巻第四号・昭和十九年四月一日発行・28〜29頁「随感」欄

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

『付記』初出末尾に「（筆者・小説家）」とある。

雪の夜の話・少女の友・五月号、第三十七巻第五号・昭和十九年五月一日発行・38〜42頁

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九巻右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

『付記』齋藤長三畫。

武家義理物語／（新釋諸国噺）・文芸・五月号、第十二巻第五号・昭和十九年五月一日発行・2〜8頁・「小説」欄

『新釈諸国噺』（生活社、昭和二十年一月二十七日）に、「義理」の標題で全文収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』（八雲書店、昭和二十四年一月三十日）に、「義理」の標題で全文収載された。

『付記』初出の末尾には「（巻一の一・死ば同じ浪枕とや）」とある。また、目次には「武家義理物語」とある。

奇縁・満洲良男・八月号、第五百五十四号？・昭和十九年八月一日発行

『付記』未確認。昭和十九年五月十六、七日頃、「満洲良男」^{ますらお}八月号のために、中村貞次郎方で執筆したもの。初め「結婚について」と題し、翌日、「奇縁」と改めたという。二十枚。青森県蟹田郵便局から、新京特別市大同大街二百十三番地の満洲雜誌社「満洲良男」編輯部に送稿されたが、掲載誌は届けられなかったという。同誌は関東軍報道部機関誌。「新釈諸国噺」中の一編で、「後に『遊興戒』と改題、書直したのではないかと憶測」されている。

東京だより・文学報国・第三十三号・昭和十九年八月十日発行・2面・「朗読文学／短篇小説特輯」欄

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第九巻右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

〔付記〕所載欄「朗読文学／短篇小説特輯」の見出しには、つぎのように記されている。

朗読して聴く者の耳に訴へる文学―朗読文学樹立の問題は、唯単に用紙不足による出版の困難、新聞雑誌の頁数減少などに依る発表舞台の激減といふやうな外部的条件の制約にのみ因る消極的理由よりも、近時に於ける放送技術事業の発展普及、工場、会社、学校その他の集団生活者層の増加に伴なふ拡声装置の整備等によつて必然的に要望せられつつある文学の新分野である、本会は夙にその重要性を認識し、朗読文学研究委員会を設置、種々その研究、普及に努めてきたが時局の推移に即応し、研究委員会は既に朗読文学委員会に発展、拡大強化更に強力なる運動を展開しつつある現状に鑑み、小説部会員の珠玉短篇を得て特輯を試みた。

また「編輯後記」には、つぎのように記されている。「朗読文学に對しては会員諸氏の積極的な姿勢を示され、多くの珠玉掌篇を得た、引続き発表するつもりである。なほ朗読文学創作に當つての技術的問題につき御意見など種々お聴かせ願ひたい。」

花吹雪・佳日・肇書房・昭和十九年八月二十日発行・153頁

『太宰治全集第九卷右大臣実朝』（八雲書店、昭和二十四年七月十五日）に、全文収載された。

〔付記〕昭和十八年六月頃の執筆。「改造」昭和十八年七月号に発表の予定であったが、不掲載に終つて、雑誌には発表されなかった。

郷愁・昭和十九年八月頃執筆

『太宰治全集第十六巻もの思ふ草（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十

七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕昭和十九年秋に出版の計画の、私家版『津村信夫追悼録』のために執筆されたもの。丸山薫が編輯に当り、昭和二十年一月には校正まで終つたが、二月初めに、印刷所が建物疎開にあい、紙型を取る暇もなく校正刷二組を残して組版を毀して終つた。その後、印刷所は爆撃の余波で焼け、用意した紙も焼けて未刊に終つた。

貧の意地―新釈諸國噺―文芸世紀・九月号、第六卷第九号・昭和十九年九月一日発行・24頁・「小説」欄

『新釈諸國噺』（生活社、昭和二十年一月二十七日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』（八雲書店、昭和二十四年一月三十日）に、全文収載された。

〔付記〕本文末尾に「（諸國咄、卷一の三、大晦日はあはる算用）」とある。目次には「貧の意地」。

人魚の海―新釈諸國噺・新潮・十月号、第四十一年第十号、通卷四百八十一号・昭和十九年十月一日発行・39頁・「創作」欄

『新釈諸國噺』（生活社、昭和二十年一月二十七日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』（八雲書店、昭和二十四年一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕鎌原正巳「青春と文学の志（文芸時評）」（「日本文学者」第一巻第八号、昭和十九年十一月一日）があるが、未入手である。

〔付記〕末尾に「（武道傳來記、卷二の四、命とらるる人魚の海）」とあ

る。目次には「人魚の海」。

純眞・東京新聞・第七百四十三号・昭和十九年十月十六日・二面

『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文収載された。

仙臺傳奇／髭候の大盡ひげさふらんだいじん・月刊東北・十一月号、第一巻第三号・昭和十九年十一月一日発行・22～24頁

『新釈諸国噺』（生活社、昭和二十年一月二十七日）は、「女賊」と改題して全文収載された。

『太宰治全集第十一巻お伽草紙』（八雲書店、昭和二十四年一月三十日）に、全文収載された。

『付記』末尾に「（西鶴、新可笑記に據る）」とある。目次には「傳記髭候の大盡」。「渡辺丙午ゑ」。

津輕・津輕（新風土記叢書7）・小山書店・昭和十九年十一月十五日発行・3～273頁

『津輕』（前田出版社、昭和二十二年四月十日）に、改訂全文収載された。

『津輕（新風土記叢書7）』（小山書店、昭和二十三年十月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十巻津輕・惜別』（八雲書店、昭和二十四年九月二十日）に、全文収載された。

『付記』『序編』『本編』から成る。末尾に「『津輕』完」とある。

一つの約束・昭和十九年頃発表

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

『付記』未確認。青森県で発行された雑誌と推測されるが、誌名、巻号、発行年月日、所載頁等、未詳。

〔追記〕この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表す。青山毅氏、小田切進氏、桜岡孝治氏、瀬尾政記氏、関井光男氏、津島美知子氏、松尾繁晴氏、森永国男氏、大阪府立中之島図書館、国立国会図書館、東京大学総合図書館、日本近代文学館、阪急学園池田文庫、北海道大学図書館、筑摩書房、中央公論社、中日新聞東京本社。

原稿受理 一九七九年六月二十一日

A Bird's-Eye View of the Works Composed
by Osamu Dazai
(1942~1944)

Shoshi Yamanouchi

The collection in titled "The Complete Works of Osamu Dazai" comprises all of what Osamu Dazai (1909~1948) ever wrote and in addition his statements at the meeting of joint criticism of contemporary literary works and round table talks, particularly those sent to print.

At the same time, efforts were made to include descriptions of those contemporary magazines which either printed the late writer's works in full, or introduced them in part previewing the "Complete Works of Osamu Dazai". This allows this edition to be used as an aid for those desiring to make reference to the said "Complete works" in relation to certain paragraphs or passages in the original writings still in the form of manuscripts.

Space is also given to critics of Dazai's writing, limited strictly to such portions as directly dealt with the late writer's works.

In the "Additional Note", allusion is made to works of Dazai published so far only as fragments and to those which failed to be printed in "The Complete Works". It also includes "notes" and "remarks" related to the works as well as to their first publication, and other remarks insofar as they relate to the literature of Dazai.